

入選

「ありがとう」が伝えたくて

千葉県 岬中学校 3年 梶山 亜莉沙

(どうしてそんなにジロジロ見るの?)

私は怒りにも似た感情で、相手をにらみ返したことがある。それは長い闘病の末、6年前に亡くなった兄が車椅子生活を余儀なくされていた頃の話だ。小学生の兄が車椅子に乗っているだけで、周囲は好奇心な目で見てくる。どこに行ってもで、つくづく嫌気がさしていた。

が、その一方で、母が優先スペースに駐車をしようとしたとき、通りがかりの人が置いてあるコーンをどかしてくれたこともあった。母は窓を開け、「ご親切ありがとうございます。」と大きな声でお礼を言う。(世の中、こんな人ばかりだったらいいのに…。)と心でつぶやく。

兄と旅行したときも、心温まるエピソードがある。一日たっぷり遊んでホテルに到着すると、兄の車椅子に気づいたフロントの方が、

「車椅子が動かしやすい、広いスペースのあるお部屋をご用意しますね。」

と笑顔で対応してくれた。母は何の気なしに「はい。」と答え、私たちは案内されるがまま歩を進めた。部屋に足を踏み入れ、兄も私もビックリ! 思わず二人で「すごーい!」と叫んでしまった。ただ部屋が広いだけではなく、すべてがゴージャスなのだ。目の前のカーテンを開けてみると、ため息が出るほどのみごとな夜景…。母はあわててポーターの方に「お部屋違うんじゃないですか?」と尋ねる。

「いいえ、こちらでよろしいですよ。皆様で楽しい夜をお過ごしください。」と言い、彼は出て行った。母は目に涙をいっぱいためて「ありがとうございます。」と頭を深々と下げていた。「えっ、どうしたの?」と聞くと、「お部屋、予約してあったのよりずーっといいお部屋にグレードアップしてくださったのよ。スタッフのみなさんのご厚意で…。」

お風呂もジャグジーだし、ベッドもふっかふか。大興奮の兄と私は、なかなか寝つけなかった。

翌朝、母がチェックアウトしようとしたとき、兄がリュックから何かを取り出した。そして、それをチェックイン時のフロントの方に、

「ありがとうございます。おかげさまでとっても楽しかったです。」

と手渡した。よく見ると、封筒に相手の名が書かれているのではないか…。前夜、車椅子の兄の前まで来て声をかけてくれたとき、名札をチェックしていたそうだ。(さすがお兄ちゃん…。)と感心した。(ママと私が寝ているすきに、こっそりお礼の手紙を書くなんて…。)

そんなやさしさと気遣いが代名詞の兄は、入院中でもメールや手紙で、私を助けてくれたり、励ましてくれた。だから困ったときは兄を頼ってばかり。(だけど、お兄ちゃんにちゃんと感謝の気持ちを伝えてない気がする。お兄ちゃんを亡くして初めて気づくなんて。お兄ちゃんの大きな愛に…。)

兄がもう一度私の前に現れてくれたら、いっしょに生きた九年分の「ありがとう」を精一杯伝えたい! そして、「私、お兄ちゃんみたいに誰にでもやさしい人になるね。」とつけ加えて。